

16章 長崎の住まい方

平野 啓子

1 節 長崎の住まい方の特色

長崎の住まい方の特色的なものとして挙げられるのは、(1)旧市街地に見られる町屋風住宅 (2)その周辺の丘陵地に自然発生的に延びる小規模な住宅群 (3)東山手、南山手付近に残る洋館風住宅の3点だと思われます。そこには、必要に迫られた先人達の暮らしの知恵が見受けられます。こうした特徴ある住まい方を生みだした背景、すなわち「長崎」を取り巻く社会環境の変化と、それに伴う長崎の街の形成の動きなどを、時代を追って探り、「長崎の住まい方」の流れと現状、これからの方向を考えてみたいと思います。

2 節 歴史と長崎の街の形成の流れ

まず、長崎の街の形成を年代を追って振り返ってみます。長崎に起こった主な出来事と、その当時のまちなみの様子を表にしてみました。

年代	主 な 出 来 事	ま ち な み の 様 子	人 口
1570	ポルトガルとの貿易港として開港。貿易商人の商取引と布教活動が展開。		
1571	大村純忠によって岬の先端近くに6町（島原町、大村町、分知町、外浦町、平戸町、横敬浦町）の町割りが実施。	「城の古址」あたりの古い居館集落とは全く異なる新しいまちなみが出現。町の中に教会堂が建設され始める。	
1579	長崎の6町と茂木を教会領として寄進。	教会領の代償として大村氏に船舶税が納められ、その一部が長崎・茂木の要塞化にあてられ、都市の整備が進み、都市の景観を表し始める。	1,000 } 1,500
1584	浦上を教会領として寄進		

年代	主 な 出 来 事	ま ち な み の 様 子	人 口
1587	秀吉が教会領を没収して公領とし、秀吉による町政整備が始まる。 伴天連追放を発令。 「宣教師は追放するも、貿易は従来通り大に行べし」とする。	貿易商人の往来が増加し、商用及び居住用建物も増加し、市街地としての質が充実してくる。	2,000
1592	長崎奉行所設置される。		
1594			3,000
1595			8,000
1597	人口の増加に対処すべく埋立てが始まる。	内町23町の整備が進み、なお外町の形成と埋立てが始まる	
1603	徳川幕府が成立し、通商奨励策をとり、朱印船貿易制度が設けられ、長崎は貿易の檣舞台となる。	貿易商人の組織化が進むと同時に、都市としての秩序が整備されてくる。	
1613	禁教令により、宣教師の国外追放、教会堂の破壊が始まる。	教会堂に替わり、神社・仏閣が相次いで建立される。外町も町制を行い、市街地が拡大していく。	
1634	「長崎くんち」が始まり、ポルトガル人収容の目的で、「出島」の築造が始まる。		
1636	「出島」が完成。	出島の中に日本人の大工職人による洋風木造建物が出現する。	
1639	1633年より第5次にわたって対外的統制を強化しこの年鎖国を完成する。 ポルトガルとも国交断絶し、翌年オランダ人が出島に入島する。	市街地の中にも、洋風の木造住宅が建ち始める。	
1663	寛文の大火により、内町23町、外町43町のうち57町の2900軒が焼失。	内町・外町の中に「くんち」見物独特の造りが始まる。 長崎復興にあたり都市計的要素が盛り込まれ、道路の拡幅、町名の整備が行われる。 内町26町、外町51町に、丸山、寄合、出島の3町の計80町となる。	40,000
1673	銭座川を水源とする倉田水樋が完成。1667年着手以来7年がかりの大業を個人の力で成し遂げ、以後順次拡大し、その後の220年間、住民に大きな恩恵を与える。	市街地50余町の人々へ水道が供給され、人々の生活が質的に向上する。	

16章 長崎の住まい方

年代	主 な 出 来 事	ま ち な み の 様 子	人 口
1680	市街地に居住する唐人貿易商の商品の盗難が頻発する為荷物蔵を造る。		
1689	唐人の市中雑居を禁止し唐人屋敷を完成させ、9373坪に唐人約2千人を収容。	十善寺の海辺に土蔵を建て、唐人用の荷物蔵とする。	52,702
1698	長崎大火により唐人の土蔵33軒のうち大半（江戸町、五島町、大黒町など）を焼失した為、新しい荷物蔵が必要となる。		65,000
1702		梅ヶ崎前面の海を埋立てて、築島を造り、倉庫などの建造物70棟が建設され、新地御蔵と呼ばれる（現在の新地）。	
1857	オランダ人の従来も多くなり、出島も手狭になってくる。	大村領の戸町村を古賀村と交換し、外国人居留地の予定とする。	
1859	鎖国終る。諸外国人が相次いで往来し、また居住するようになる。	南瀬崎、梅ヶ崎、大浦下松の岸を埋め立て、又、常磐町から大浦にわたる海面も埋め立てて、外国人居留地とする。	
1860		大浦川沿の全長約414間を一等地、その内側を二等地、山手地区を三、四等地として外国人に貸与する。	
1863		下り松、松ヶ枝などを埋め立てて、外国人居留地の区域を定める。	
1866		南瀬崎米倉以南を居留地とする。これによって、出島・新地も居留地に編入される。	
1867	明治となる。		
1877	横浜・神戸といった大都市を控えた港に主な貿易の商取引が移り、長崎に居住する外国人が少なくなる。		
1884	官営の長崎造船所が三菱に払い下げられ、規模を拡大していく。	人口の自然増加と工場労働者の流入により、既存市街地のみでは足	

年代	主 な 出 来 事	ま ち な み の 様 子	人 口
1886 }	伝染病が流行し、下水排水の整備を始める。	りず、周辺の丘陵地の斜面地域に居住地を求める。	
1887		下水溝の整備が進み、現在も残る下水溝がある。排水処理の為、第1次港湾改良工事が行われ、出島の市街地側の石垣が現在の地点まで下げられる。	
1891	本河内水源池完成。	5月16日に通水開始。 5月28日夜、築町の一角から出火するが、初期消火に威力を示し、2戸の全焼でくい止める。本河内水源池の完成により、220年近く住民に恩恵を与えた倉田水樋の役割が終わる。	
1897 }	戸町村、湊村を市に編入以後、大正・昭和の時代に周辺の村を編入し、市街地を拡大していく。	第2次港湾改良工事により、出島・新地の原型を失い、陸続きとなる。	
1904			
1899		大浦周辺の丘陵地以外の丘陵地にも民家が立ち並び始める	

3 節 町屋風住宅について

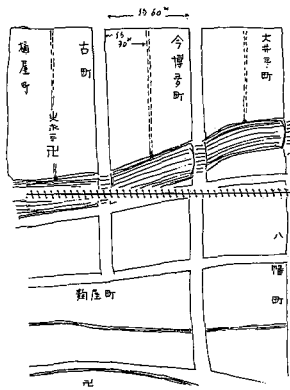
開港後すぐに始まる長崎の町割りの特徴としては、通りをはさんで町名が同じという事です。奥行約60m位の1ブロックの中の真ん中に溝が走り、その溝を境にして町が別れていました。この溝が一部、今も残っている所もあります。奥行60mの約半分の約30mが一軒分となります。通りに面した両方が同じ町内だった訳ですが、今は、町名変更が行われ、通りが町の境になっています。しかし、「おくんち」の踊り町や年番町の時は、今でも、昔の町別で参加する町も多くあります。そして、そこに建っている建物は町屋風の建て方で、通りからはまっすぐに小路（ショウジ）とも言われる通路が中庭まで続いています。この中庭は日当たりと、風通しの為という事はもちろんですが、「おくんち」に参加するときの庭見せ用でもありました。通りから中庭にかけては、少し勾配がつけられ（排水の関係もあったのでしょうが）表側の部屋より

16章 長崎の住まい方

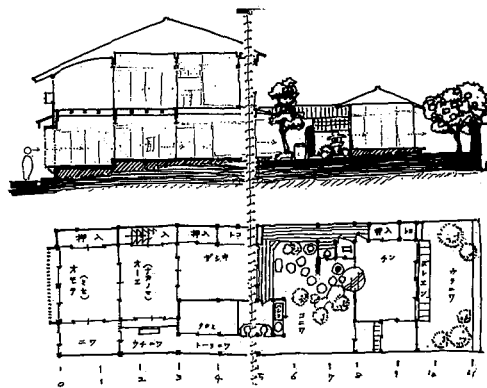
も中の間が少し高くなり、「おくんち」の衣装や飾り物、お祝いの品々などを陳列し、奥の中庭まで見通しやすくなっています。もちろん、表の格子は全部はずされて、その内側のガラス戸も取り外してあります。

また、「おくんち」の出し物が町の中を移動する時や、庭先回りなどの時の為、見物する部屋を通りに面して造っている家もありました。格式の高い造りの家で、通りぎりぎりの所に窓をつけた部屋を設けているという建物は他で

丹羽漢吉氏自筆のスケッチ画集より抜粋



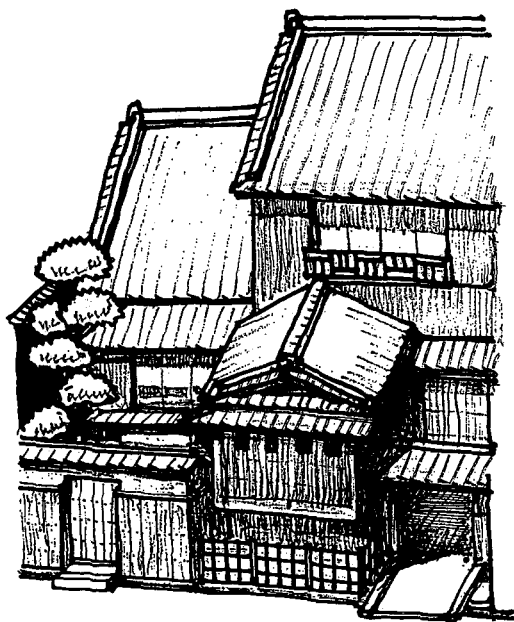
現在も残る町割り



町屋住宅の平面・断面



道路拡張前の旧市長公舎
(くんち見物用の窓を持っている)



くんち用の窓と木戸を持つ家

はまったく見受けられません。そして表に設けられた木戸も「おくんち」の庭見せ用の出入口です。この木戸を入れて中の座敷に並べられた品々を眺めてもらい、庭の樹々も、座敷から見てではなくて、木戸の方から見て感じが良いように、植木の選定もしていたそうです。先人達の「おくんち」に対する思い入れを感じます。

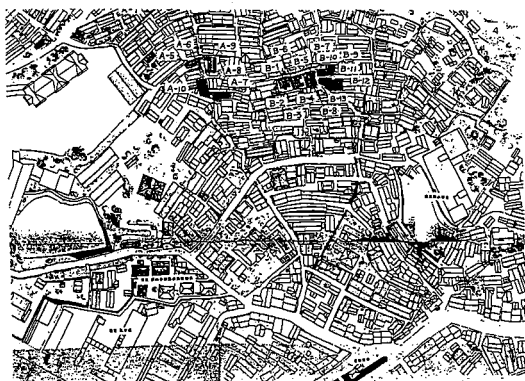
4 節 丘陵地の住まい方について

さて次に、人口増に伴い丘陵斜面地に住みついていった人々も多く、小規模な住宅郡を作っていました。昭和43年の夏に、知人の卒業論文の調査の応援にかり出され、東山手地区の斜面住宅地を一夏中動き回っておりました。斜面を利用した住宅の建て方や、車が入らない地域での暮らし方はとても興味深いものでした。階段状の坂道は上り下りも楽ではありません。ところどころにひと休み出来るような、今で言うところのポケットパークのミニチュア版的スペースがあり、また小さな商店があり、そこは住民同志の年代を越えたコミュニティースペース的役割を果たしているようでした。そして、その坂道も決して直線的ではなく、曲がったり、折れたり、上り下りする度にアイストップ的な何かがあり、上る時の山並み、下る時の下の町の風景が微妙に変化し、非常に目に快適でした。

5 節 これからの長崎の住まい方について

生活の中に密着した地域総出のおまつりが、住宅の建て方に影響を与えていた旧市街地の町並みの中で、現在、建て替えが進行している状況ですが、こうした伝統をどう残していくか、地域によってはRC造やS造にしないといけないう所もありますが、木造3階建も可能になりましたので、ゆとりある居住スペースの確保と、車庫スペースの確保などから、上へ伸ばしていく方法も考えられます。又、1階部分を店舗や事務所として利用する場合も、何か昔の雰囲気を残す有効な方策はないのか、今一度深く考えてみる必要があるようです。

斜面住宅地のこれからの方向として、長崎市が行っている「長崎市西浦上地区優良住宅地段階整備誘導計画」という長い名前の計画があります。長崎県のウッドタウンプロジェクト基本構想の中にも斜面地の処理の模式が出ておりま



昭和43年当時の東山手町辺り



昭和43年当時の東山手町の民家の断面の例

したので紹介しておきます。生活様式が変化し、人々の価値観が変わって来ている中で、斜面地を生かした地域づくりは今、模索の段階のような気がします。

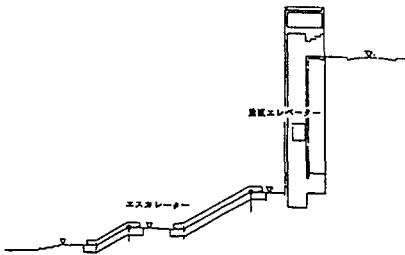
「まつり」を媒体としてコミュニティーづくりをしていった旧市街地。斜面という車社会から切り離された所で、地形が縁となってコミュニティーがつく

16章 長崎の住まい方

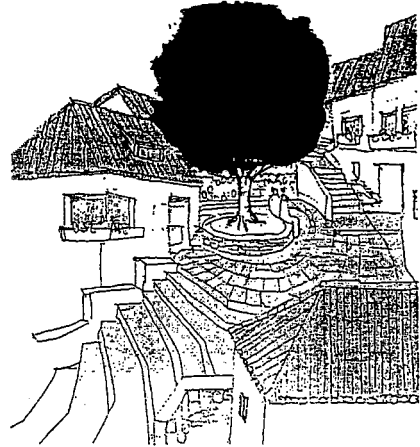
られていった地域。そして、今回割愛させてもらった東山手、南山手の洋館での先人達の暮らし方、日本に住んでいて世界を相手に暮らした人々によってつくり出された独特の雰囲気のある地域。この3つの地域の暮らし方の中から現在にもつながる部分をさぐり、それぞれの地域での「新しい住まい方」をいかに現代に引き継いでいくかが、これからの課題であり、長崎に住む現代の人間の知恵を集める必要があるようです。

長崎市「西浦上地区優良住宅地階段整備誘導計画」より

主要歩行者動線断面
(自動昇降装置)



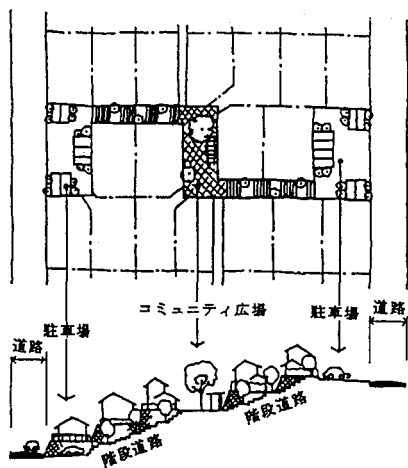
コモンスペース
内のテーマ木



斜行エレベータ



長崎県「ウッドタウンプロジェクト基本構想」より



戸建住宅地における
斜面高低差処理の模式